

日本英文学会東北支部 第74回大会資料

時：2019年11月23日(土)

所：東北学院大学土樋キャンパス
ホーイ記念館
(仙台市青葉区土樋一丁目3-1)

日本英文学会東北支部事務局

〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149
宮城教育大学 英語教育講座 竹森徹士研究室内
電話：022-214-3496 / E-mail：tohoku@elsj.org

第74回大会懇親会のご案内

第74回大会懇親会を以下のように開催致します。詳細および申し込みについては、10月に支部会員宛に別送する案内をご覧ください。

【日時】 2019年11月23日(土) 午後6時30分～8時30分

【場所】 ホテルベルエア仙台(仙台市青葉区一番町一丁目4-8)

日本英文学会東北支部

2019年度 大会役員一覧(敬称略)

支 部 長	大河内	昌						
副 支 部 長	川田	潤						
理 事	大西	洋一	奥野	浩子	金子	淳	金子	義明
	境野	直樹	佐々木	和貴	鈴木	亨	鈴木	雅之
	竹森	徹士	村上	東				(五十音順)
大会準備委員	鈴木	淳	小林	亜希	星	かおり		
	五十嵐	啓太	近藤	亮一				
開催校委員	福士	航						
事 務 局	竹森	徹士(事務局長)			島	越郎(事務局長補佐)		
	酒井	祐輔(事務局員)						

日本英文学会東北支部第74回大会プログラム

時：2019年11月23日(土)

所：東北学院大学土樋キャンパス ホーイ記念館3階
(仙台市青葉区土樋一丁目3-1)

理事会 10時30分より(演習室H305)

開会式 12時30分より(教室H301)

□開会の辞 日本英文学会東北支部長 大河内 昌

研究発表

第1発表 13:00 - 13:30 第2発表 13:30 - 14:00
第3発表 14:00 - 14:30 第4発表 14:30 - 15:00

第一室(教室H301)

司会 東北大学名誉教授 鈴木 美津子

1. オースティン作品におけるジェントルマンと感受性

東北生活文化大学短期大学部准教授 佐藤 恵

司会 山形県立米沢女子短期大学准教授 小林 亜希

2. 日本という物語：

アラン・ブース『失われたものを探して』における地域イメージ形成

八戸工業高等専門学校准教授 菊池 秋夫

司会 東北学院大学准教授 井出 達郎

3. メデューサの首は誰のものか？

—— J. D. サリンジャーの「グラス家の物語」における眼差しと〈スティグマ〉

流通経済大学准教授 野口 元康

司会 仙台白百合女子大学講師 熊谷 治子

4. T・S・エリオットとアメリカ北東海岸

東北工業大学(非) 米澤 光也

第二室(教室H302)

司会 岩手県立大学講師 五十嵐 啓太

1. 英語と中国語における間接疑問縮約文

東北大学大学院 李 成曼

2. 補文標識に対する音韻的分析

東北大学大学院 田村 惇

SYMPOSIUM (15:15 - 17:30)

英米文学部門 (教室 H301)

英米文学のなかの女性の声を再考する

司会・講師	東北工業大学准教授	鈴木 淳
講師	東北学院大学大学院	青木 愛美
講師	東北学院大学(非)	星 かおり
講師	東北学院大学(非)	相田 明子

英語学部門 (教室 H302)

英語の通時的变化に関する生成統語論的研究

司会	弘前大学講師	近藤 亮一
講師	名城大学准教授	久米 祐介
講師	皇學館大学助教	玉田 貴裕
講師	筑波大学助教	山村 崇斗
講師	関西学院大学准教授	茨木 正志郎

13時

研 究 発 表

第一室 (教室H301)

司会 東北大学名誉教授 鈴木 美津子

オースティン作品におけるジェントルマンと感受性

東北生活文化大学短期大学部准教授 佐藤 恵

ジェイン・オースティン(1775-1817)が本格的に創作活動を行った1790年代から1810年代は、世界経済の中心がアムステルダムからロンドンに移行し、金融・サービス業が発達した。従来のジェントルマンである土地に根差した貴族とジェントリ、さらには神学・法学・医術・軍人の専門職に加え、19世紀には貿易商や銀行家など商業に従事した中流階級出身のジェントルマンが増えていく。土地を所有する不労所得者であることは必須要件から理想要素となっていく。その際ジェントルマンたる要素は、氏素性といった社会的特性から資質やモラルといった個人的特性へ、限嗣相続の不動産から家財・商品・投資などの動産へと比重を移していく。本発表では、オースティンの主要作品におけるジェントルマンの個人的特性に感受性が果たす役割の差異と類似性について、職業、特に商業従事者あるいは商業資産に注目しながらsense(感覚/感性)の観点から考察してみたい。

司会 山形県立米沢女子短期大学准教授 小林 亜希

日本という物語：

アラン・ブース『失われたものを探して』における地域イメージ形成

八戸工業高等専門学校准教授 菊池 秋夫

旅行記文学の側面として、舞台となっている地域の現在の状況のみならずそこにまつわる歴史、文化的背景に関してのエピソードやこぼれ話なども読者にとって少なからぬ醍醐味といえよう。こうした旅行記では、描写する地域についての通時的な背景を伝えることで、(筆者の視点というバイアスを通してながらも)地域の個性化、イメージを読者にもたらしめていることは論を待たない。地域イメージの形成と文学の役割のメカニズムは、ロマン派の湖水地方観光などで議論されてきているものの、20世紀後半の旅行記文学においては必ずしも十分に論じられてきたとはいえない。

本発表では、アラン・ブース(Alan Booth, 1946-1993)の『失われたものを探して』(*Looking for the Lost*)における中部地域の表象を、特に歴史的な背景への言及などから形成される地域イメージの観点から検討する。そうすることにより、地域イメージの形成における文学の役割のメカニズムを解明し、その中で歴史言及が果たす意味を明らかにしていきたい。

メデューサの首は誰のものか？

— J. D. サリンジャーの「グラス家の物語」における眼差しと〈スティグマ〉

流通経済大学准教授 野口元康

J. D. サリンジャー (1919–2010) 作 “Seymour: An Introduction” (1959) において語り手 Buddy の引用には、Seymour からもらった自身の創作へのコメントが含まれており、その一つにメデューサの首のモチーフへの言及がある。雑多なエピソードの多い本作の中でこのコメントはあまりにも短く、どの創作へのものなのかははっきり書かれていないためか、従来の批評では見過ごされてきた。本発表では、“Raise High the Roof-Beam, Carpenters” (1955) において、登場人物の描写にメデューサの首のモチーフが用いられていることをまず論証する。次に、グラス家の子供たちがラジオのクイズ番組に出演していた有名人であるという属性を〈有名性〉と捉え、その〈有名性〉が消費の対象となっていることに注目する。さらに、Seymour をめぐる登場人物のやりとりに社会学者 Erving Goffman の〈スティグマ〉概念を当てはめられることを主張する。

以上の考察を踏まえて、“Seymour: An Introduction” の複雑な語りにおいてメデューサの首がパズルのピースとして欠かせないものであることを明らかにしたい。

司会 仙台白百合女子大学講師 熊谷治子

T・S・エリオットとアメリカ北東海岸

東北工業大学(非) 米澤光也

1943年に世に出た『四つの四重奏』(Four Quartets) は、全四部からなる、T・S・エリオットの後期の代表作である。彼はこの瞑想詩の第三部に、「ドライ・サルヴェイジズ」(“The Dry Salvages”) という題をつけた。ドライ・サルヴェイジズとは、アメリカのマサチューセッツ州、アン岬にある海岸である。長年、この地方海岸は、アメリカを離れてイギリスの詩人となったエリオットが、懐古的に振り返る場所だと思われてきた。しかし、すでにいくつかの研究が示唆しているように、エリオットが、この海岸を、『荒地』(The Waste Land) (1922) やその他の代表作でも詩のトポスとして構想していた痕跡がある。そのため、大都市ロンドンを舞台とする『荒地』から、英国の田舎を描く『四つの四重奏』へ、というエリオット研究の基本的な理解は、再度点検される必要がある。エリオットは、ドライ・サルヴェイジズというニューイングランドの特定地域をどのように描いたのだろうか。

第二室 (教室 H302)

司会 岩手県立大学講師 五十嵐 啓 太

英語と中国語における間接疑問縮約文

東北大学大学院 李 成 曼

先行研究では、間接疑問縮約において、英語は移動と省略 (Merchant 2001) で分析する。一方、中国語は移動と省略分析 (Wang and Wu 2006) と *pro* 分析 (Wei 2001) の二つの対立的な分析が提案されてきた。

本発表では、英語と中国語における間接疑問縮約の共通点と相違点を観察し、それを用いて中国語の間接疑問縮約は二つの派生があることを示す。二つ分析がある点を踏まえると、移動の証拠話題句と *Pro* の証拠複合名詞句の島からの抜き出しを用いて同時に仮定し、間接疑問縮約文は非文になると予測される。実際、そのような間接疑問縮約文は中国語では許されない。なぜなら、移動の話題句には *Pro* 分析が構造を持たず、話題化された要素に対して説明できず、また、*Pro* の複合名詞句の島からの抜き出しには移動が左枝抜き出し条件と複合名詞句制約の両方に違反するためである。よって、中国語の間接疑問縮約には移動と省略分析と *Pro* 分析を両方が必要と提案する。

補文標識に対する音韻的分析

東北大学大学院 田 村 惇

節が動詞の補部位置にある場合、顕在的な補文標識 (*that*) と非顕在的な補文標識 (\emptyset) は随意的である。一方で、動詞が選択する節が補部以外の位置 (非基準的位置) にある場合、*that* が義務的に現れる。An (2007) は、非基準的位置にある節はイントネーション句 (IntP) を形成することを指摘し、IntP の端が非顕在的ではないという一般化を提案している。しかし、根節は IntP を形成し、かつ左端に \emptyset 主要部が現れている。本発表は、 \emptyset 主要部を持つ IntP が、文全体を含む最大の音韻構成素 Utterance を形成すると提案することで *that*/ \emptyset の分布を説明する。この分析に基づくと、Utterance が文全体を含む適切な音韻構造を持つ文は容認される。一方、Utterance が文全体を含まない不適切な音韻構造が得られる文は容認されない。

15時15分

SYMPOSIA

英米文学部門 (教室 H301)

英米文学のなかの女性の声を再考する

司会・講師	東北工業大学准教授	鈴木	淳
講師	東北学院大学大学院	青木	愛美
講師	東北学院大学(非)	星	かおり
講師	東北学院大学(非)	相田	明子

本シンポジウムでは、イギリス文学部門とアメリカ文学部門に共通し、しかもどの時代の文学テキストにも必ず登場すると思われる「女性の声」を一つの大きなテーマとして取り上げる。

プログラムの進行としては、男性によって書かれたソネットやエレジーのような伝統的なイギリス詩のなかの女性の声についての議論に始まり、次に実際の生活の中から生じるアメリカ黒人女性の叫びとも言える声、さらには、最後にポストモダニズムにおける、ジェンダーの枠やフィクション／リアルの枠に問いを投げかける女性の声についての議論で終わる。シンポジウムの目的は、文学テキストにおける女性の声がいかに複雑であり、そしていかに挑戦的なものであるかを確認することである。

ソネットの中の女性
シドニーの『アストロフェルとステラ』

青木 愛美

1580年代にサー・フィリップ・シドニー(Sir Philip Sidney 1554-86)が執筆し、シドニーの死後、1591年に出版されたソネット連作『アストロフェルとステラ』(*Astrophil and Stella*)は、16世紀イギリスでのソネットの流行へと繋がった。この連作は、シドニー自身を想定したアストロフェルが語り手となり、ペネロピー・リッチ(Penelope Rich)という女性をモデルとしたステラへ語り掛ける形をとる。シドニーはソネットのコンヴェンションともいえるべき女性賛美を連作に用いたが、それだけにとどまらず、相手の女性が自分を受け入れたことを示唆するソネットも書いている。そこには女性の意思が存在し、アストロフェル、延いては詩人への返答が含まれることになる。

本報告では、連作内のステラの声を手掛かりに、男性詩人の書くソネットの中に存在する女性の役割を明らかにしたい。また、当時の女性の美德(obedience, silence, chastity)によって「書く」、あるいは「語る」主体となることができなかった女性が、男性詩人の書く詩の中で主体となる可能性についても考えてみたい。

語る妻の幽霊
ハーディのエレジーのなかの女性の声と転覆

鈴木 淳

「1912-13年詩集」(Poems 1912-13)と題されたトマス・ハーディ(Thomas Hardy)の一連のエレジーでは、男性詩人が昔の美しい妻の姿を想像しながら、妻の死を嘆く。これらのエレジーについて、これまでは悲しみや生前ないがしろにしていた妻への罪ほろぼしという解釈がなされてきた。しかし、近年の研究では、ハーディはエレジーが死者を嘆くものではなく、生きている詩人の利己的、または芸術上の目的のためのものであることを暴露したとされている。

本報告では、先行研究を発展させる形で、ではその生きている詩人の芸術上の目的がハーディのエレジーのなかで実際に達成されているかどうかを見ていきたい。その際には、ハーディのエレジーのなかで読者に対して語る妻の幽霊の声に注目し、それが、男性詩人が描こうとするエレジーの世界を崩していることを提示する。また、ハーディが、エレジーだけでなく、ロマン派の詩の伝統も転覆の対象にしていたということも論じてみたい。

隠された手紙
Alice Walkerの*The Color Purple* (1982)における女性の声

星 かおり

Alice Walker (1944-)は代表作*The Color Purple* (1982)で、アフリカ系アメリカ人女性の苦悩が社会における人種差別だけではなく、黒人コミュニティに内在する性差別にも原因があることを赤裸々に描いた。

物語冒頭から響く「神様以外の誰にも言うんじゃない。それを聞いたらお前の母さんが死んでしまうからな。」と主人公Celieを脅迫する声に従い、彼女は“Dear God”と呼びかける手紙を書き続ける。この手紙の宛先から分かるように、彼女の手紙の読み手は実在せず、彼女の声／手紙は誰にも届かない。しかし、あるきっかけでこの手紙の宛先が変更される。

本報告では、Celieの手紙の宛先の変更を手掛かりに、Celieの語りの中に登場する女性達、または男性達の声に着目し、Celieが閉鎖的な環境から自立するまでに、彼女達／彼らの声がCelieの精神に及ぼしていた影響を提示する。また可能であれば、本作品とWalkerの他作品と比較し、Walker作品の女性登場人物達のアイデンティティ回復の困難さを考察したい。

“Cockney Venus”
*Night at the Circus*におけるFevversの言説

相田 明子

Angela Carterの*Night at the Circus* (1984)の主人公Fevversには翼がある。物語は1898年のロンドン、主人公が自分の生い立ちを語る場面から始まり、彼女は自分が「卵から孵った」のだと述べる。Fevversの職業はサーカスの空中ブランコ乗りで、観客は「Fevversの翼は本物か否か」に懐疑心を抱きながらも、空中を舞う彼女の姿に深く魅了されてしまい、事の真偽はいつもうやむやになる。そうすることによって、Fevversは、どのような既成概念にも属さない存在として、物語中に自己を設定することに成功すると同時に、二項対立的な概念形態によって差異化されている

事柄の境界線をじりじりとずらしているように思われる。

本報告では、大文字のヒストリーのなかに堂々と介入していく Fevvers の言説に着目し、考察を深めたい。

英語学部門 (教室 H302)

英語の通時的変化に関する生成統語論的研究

司会	弘前大学講師	近藤亮一	
講師	名城大学准教授	久米祐介	
講師	皇學館大学助教	玉田貴裕	
講師	筑波大学助教	山村崇斗	
講師	関西学院大学准教授	茨木正志郎	

本シンポジウムでは「英語の通時的変化に関する生成統語論的研究」をテーマに、古英語、中英語、近代英語、現代英語の各時代、あるいは通時的に観察される構文や現象に対して、歴史コーパスなどから得られたデータの分析に基づき、生成文法の理論的枠組みにおいて原理的な説明を試みる。特に、統語と意味の両面から実証的かつ理論的な議論を展開する。シンポジウムの前半では、動詞を中心とした構文の通時的発達として、(1) 中間構文と (2) 結果構文を扱う。興味深いことに、この両構文の発達には叙述構造の出現が関連していると思われる。後半では、名詞を中心とした DP 構造を扱う。(3) 形容詞を含む DP 構造については、古英語の等位構造を中心に議論する。そして、(4) 冠詞について、その出現時期をコーパス調査より特定し、統語構造上における発達を明らかにする。これらの議論を通して、「英語の通時的変化に関する生成統語論的研究」の利点と課題を浮き彫りにし、今後の歴史言語学の発展につながる場としたい。

英語史における中間構文の発達について

久米祐介

現代英語の中間構文 (The book reads easily.) は、意味上の目的語が統語上の主語として現れる点で能格構文 (The vase broke yesterday.) と似ているが、中間構文には、潜在的動作主の含意、法助動詞・否定辞・様態副詞のいずれかとの義務的共起、表層主語の属性・性質の叙述的解釈、状態変化を含意しない動詞の生起という能格構文にはない特性が観察される。本発表では、歴史コーパスなどから得られたデータを分析し、中間構文の発達過程を統語・意味変化の両面から議論する。能格構文は古英語からすでに観察される。そして、中英語で能格構文に法助動詞・様態副詞が現れるようになったことで、構文の解釈がイベントを表すのか主語の特性・属性の叙述なのかあいまいとなり、統語構造に再分析が生じた結果、中間構文が派生したと主張する。具体的には、叙述構造と arbitrary PRO の導入である。この2つの統語変化によって、能格構文には現れない状態変化を含意しない動詞 (bribe, read など) が中間構文には生じるようになったと結論付ける。

英語史における結果構文の発達について

玉田 貴裕

影山(1996)の分類法によれば、結果構文は2種類に分けられる。一つは本動詞が状態変化を含意し結果述語がその変化を詳述する「本来的結果構文」(e.g. My brother painted the wall red.)であり、もう一つは本動詞が状態変化を含意せず結果述語が状態変化を表す「派生的結果構文」(e.g. John hammered the metal flat. They ran the pavement thin.)である。Visser (1963)によれば、英語では中英語期まで、上記の2種類の結果構文のうち、本来的結果構文に該当するタイプの例しか観察されない。本発表では、この事実に関する Broccias (2008)の調査結果を検証し、独自の調査に基づき結果構文の発達過程を明らかにしながら生成文法理論の枠組みでその説明を試みる。初期の英語では目的語に比べて動詞が相対的に卓越しており、結果述語の機能は動詞の意味を補強・強調するにとどまっていた。しかし中英語から初期近代英語にかけて目的語の卓越性が強まっていき、最終的に目的語を因、結果状態を地とした叙述関係の形成が可能となる(cf. 鈴木(2013))。この叙述関係は中英語期に出現した機能範疇RPによって可能になったと主張する。

古英語の名詞句における非対称統語構造について

山村 崇斗

古英語の名詞句DPにおいて、(1)のように、第一等位項では主要部名詞とそれを修飾する修飾語が現れる一方で、第二等位項では主要部名詞が現れず、修飾語のみが生じる、等位接続の事例が観察される。

(1) *softne drenc & swetne* (lit. soft drink and sweet)

Fischer (2012)によれば、(1)のような、DPの中で「形容詞+名詞+等位接続詞+形容詞」という語の連続が見られる構文は、意味の観点から2種類に分類できる。ひとつは、(1)のような事例で、用いられている形容詞のもつ意味が同種であり、どちらの形容詞もひとつの名詞を修飾していると考えられるものである。この場合、*soft*かつ*sweet*である飲み物を指していると言える。もうひとつは、(2)のように用いられている形容詞のもつ意味が対立を示す場合である。

(2) *þon gesewenlican wisan & þam ungesewenlican* (lit. the visible way and the invisible)

この事例では、*visible*を意味する形容詞と*invisible*を意味する形容詞が用いられている。ひとつの実在が同時に「可視」と「不可視」の性質をもつことができないことを考えると、*visible way*と*invisible way*という別個のものを指していると言える。

このような非対称的な等位接続構造について、York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE)からの事例を紹介し、可能な統語分析について検討する。

英語の冠詞の出現・発達について

茨木 正志郎

現代英語の定冠詞*the*は、古英語の指示詞*se*から生じた。つまり、古英語の指示詞*se*は、現代英語であれば定冠詞*the*が期待される文脈で使われており、直示的機能と前方照応的機能を持っていたが、それぞれの機能に特化した定冠詞と指示詞へ発達したと言われている。一方、不定冠詞*a(n)*は古英語の数詞*ān*から生じたと言われている。しかしながら、冠詞の出現時期や発達過

程について厳密な調査に基づいて分析している文献は管見の限りほとんどない。そこで本発表では、冠詞の出現・発達について、それらが出現・確立した時期、古英語指示詞・数詞の統語位置、発達過程の3点より議論する。まず、YCOE、PPCME2、PPCEME等の史的コーパスを用いて調査を行い、形態論の観点よりそれぞれが出現・確立した時期を明らかにする。次に、古英語の指示詞の統語位置について、先行研究によって指定部要素か主要部要素かで意見が分かれるが、本発表では主要部要素であると主張し、さらに構造上における変化を明らかにする。最後に、英語の冠詞の発達は、Hopper and Traugott (2003)での分化 (divergence) と漂白化 (bleaching) による機能語から接語への文法化であると主張する。

大会会場（東北学院大学土樋キャンパス ホーイ記念館）へのアクセス

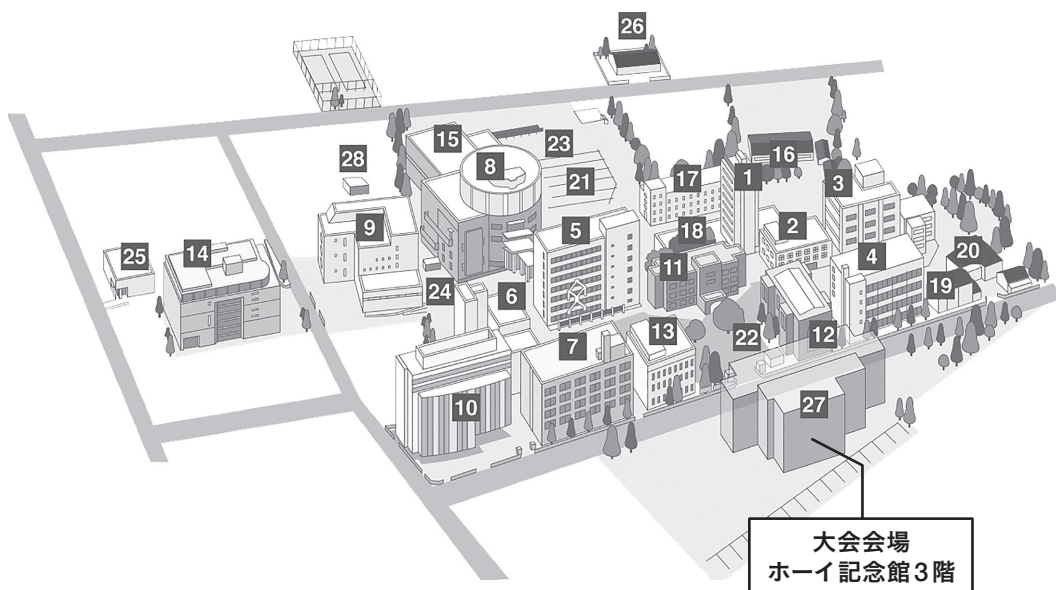
JR 仙台駅から

- ・徒歩約20分
- ・地下鉄南北線「五橋駅」または「愛宕橋駅」から徒歩約5分
- ・バス停「五橋駅」から徒歩約5分

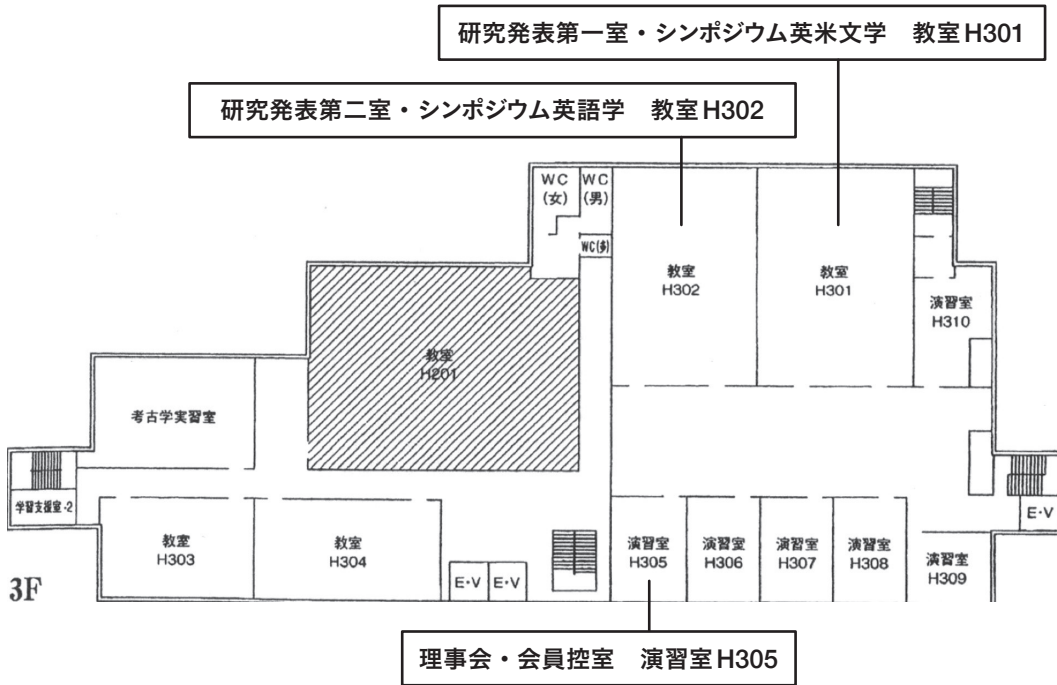
周辺地図（右）



東北学院大学 土樋キャンパスマップ（下）



施設平面図 (ホーイ記念館3階)



懇親会会場地図

会場：ホテルベルエア仙台（仙台市青葉区一番町一丁目4-8）

JR 仙台駅西口中央出口より徒歩 12 分、地下鉄東西線青葉通一番町駅出口より徒歩約 5 分



(ホテルベルエア仙台 HP より)